



ceramic redrawing H1100×W600×D600mm 陶 2021

はじめに

筆者は線のドローイングをもとに土で造形し、焼成することで陶の作品を制作してきた。筆者にとって線を描くということは形を浮かび上がらせる行為であり、土でフォルムを構築していく過程で重要な役割を担っている。線は平面上のみにとどまるものではなく、土で造形した立体が空間に存在するための手がかりとなるものであるのだ。描かれた線が立体へと変化する過程を分析することで紙に描いた線が素材に置き換わった時に、モノとして線がそこに存在するまでの過程の中で、どのような変化が起こるのかを論考し、新たな立体表現の可能性を模索することが本論の目的である。また、筆者が制作の素材として扱う陶は、土を成形し乾燥させ焼成することでできあがる。この段階的なプロセスと、線が平面から立体へと移り変わるプロセスとの関係性を考察することで、陶による造形の新たな可能性を探る。

第1章 線の分類

第1章では本論における線の定義を明確にすべく、まず線の定義や線の認識基準について考察した。線は概念的にとらえれば太さがなく実際には見ることもできないが、私たちは日常の中で様々なものに線を見出している。そこには何らかの基準があるのではないだろうか。筆者が視覚的に線を感じる対象を探るため、パウル・クレー、ヴァシリー・カンディンスキーの著書をもとに、線の種類や線がもたらす効果について論じた。結論として線を明確に定義することは困難であったが、両者の線に対する思考を踏まえた上で、線は運動による産物であると結論付けた。また、これらの分析は2次元的な線にとどまることはなく、3次元の空間に構築される線として変化する可能性を持つのではないかという考えに至った。

第2章 諸作品における線の表現

線の定義や種類、効果などを踏まえた

上で、第2章では諸作品にみられる線の表現を分析した。また、分析をする上で作家の手で線を描いたり、立体を造形したりする際に生じる手のブレやゆがみといったものを〈ノイズ〉という言葉で表現した。第1節では平面作品を扱い、浅野弥衛、文弥有佳里の作品における線の表現を考察した。第2節では立体作品を扱い、アンソニー・カロ、ジャン・アルブの作品における線の表現を考察した。各作品の分析から、作家の手の運動によるノイズが線の表現に影響を及ぼしているとした上で、立体作品では素材を加工したり接合したりする際の手の運動と、線的なフォルムは密接に関係しあい形が造形されていくのではないかと結論付けた。

第3章 陶素材における線の表現

本章では前章で論考した線の表現を踏まえた上で、筆者の扱う陶素材における線の表現についてさらに考察した。第1節では陶素材における成形技法について述べ、第2節では陶素材の作品にみられる線の表現を分析するため、エヴァ・ヒルド、長江重和の作品を挙げた。成形方法の違いも含めた上で、両者にみられる線の表現と陶という素材の関係性を比較検証した。第3節では筆者の作品にも結び付く、陶で線を立体化することについて考察した。2次元の線を立体として3次元に存在させることは元の描かれた線とは異なるものとなり、そこに線の変化があると筆者は論じた。さらに、絵画やスケッチ、ドローイングにおける線の表現は作者の手の運動が直接的に線に反映されるのに対して、立体における線の表現は様々な過程を経て蓄積された作者の手の運動に加え、素材そのものが線に変化を与えているとした。その中でも陶は乾燥や焼成といった過程を踏むため、ほかの素材よりも特に変化が激しい素材であり、線が立体としてそのままの形を維持するのではなく、ノイズを含みながら全く新たなものへと昇華されるのではないかという考えに至った。土で線を立体化することは土を積み上げたり削り彫り

こんだりする際の手の運動の軌跡であり、土で線を描くという行為になるのではないかと結論付けた。

第4章 作品「ceramic redrawing」制作報告

本章では研究内容を踏まえた作品「ceramic redrawing」の制作過程及び制作報告を述べた。制作工程を6つに分けそれぞれ解説した上で、筆者が制作する中で感じた陶という素材の造形的特徴や線の表現との関係性を論じた。これまでの筆者の制作において一貫したプロセスであったドローイングから陶という素材で線を表現することは、土で線を描いたり作り上げたりという感覚へと変化していった。また、陶という素材を用いて、筆者は紙や紙とは違った制約のない、空間に対してドローイングをしているのではないかとも思考するに至った。それは紙面上に線を描く行為よりもはるかに複雑な関わり合いが繰り広げられるのではないかと結論付けた。

おわりに

本論では線の定義や分類を行った上で諸作品における線の表現や自身の領域である陶素材の作品における線の表現について考察した。さらに、線という2次元的なものを3次元として立体化することでどのような変化が起こるのかについても論じた。線という曖昧で明確に定義することが難しいものを扱う中で、曖昧さを残しつつも筆者の感じる線の造形の要因を線の認識基準や諸作品に見られる線の表現について分析した。線というものは運動の産物であり、筆者の扱う陶という素材は線を立体化する過程で乾燥や焼成という工程を踏むことで運動というノイズを孕みながら線が変化していくのではないかと論じた。それらは筆者の制作の根幹にあるものとなりえ、陶素材ならではの造形があると結論づけた。